

「クラスのとたより」

をはじめて

猪熊 信子

子どもと毎日を過していると、折にふれて私の心にびーんと何かを感じさせることがある。それは楽しくなるようなこと、悲しいこと、なるほどと思うこと、おや？

と思うことなどさまざまだが、それらを忘却の彼方へ消し去るのは残念で、私はノートに書きとめておく。そうしたノートが幾冊か机上に置かれるようになった。時折そのページをかえして今日の子どもの様子と考え合わせるの楽しいものだ。

しかし今年度は私ひとりですみ考えているよりも、父母に知っていただけたらと時折ノートに記すようなことをプリントして配ることにした。

あおくみのたより 第一号 五月二日

このほりがはためいて、子どもの日が間近になりました。「よそのお子さんの様子は？」「幼稚園ではどんなことをしているのかしら？」という声も聞きますので、クラスの様子や私の感じなどを書くことにしました。

でも私の方からだけのたよりでなく、呼べば答えるこだまの如きPの声ものせられたら、どんなにすがすがしいものになるかと、五月の空をみあげて思っています。

こんな書き出しで五月は第五号までプリントした。その頃四、五人の父母から具体的な様子を知らせていただいてありがたいというような声を聞いた。それと同時にPの方からもたよりが届くようになった。次はその中の一つである。

私は悪いと思いつながら、時折おとなの

身勝手から子どもを叱ってしまいました。

今日もそうでした。帰宅後おやつにアイスを食べました。それから二時間も経たぬにお友だちが食べたからとまたおねだりです。思わず私は「だめよ。」ときびしく言ってしまいました。子どもはめめめめし始めましたので「我慢をする子がいい子よ」と言い聞かせましたが、めめめめそれは止みません。そこでまた叱ってしまいました。その後私は黙秘権を使用しました。

二十分ほど経って、台所にいる私の傍へ子どもがやってきました。「ママが時々叱るので家にいたくなくなるんだよ、アイスも初めは少ししかほしくなかったけど、叱られたら急にこんなに(両手を一ぱい拡げて)ほしくなっちゃったの。」と言いつながら、ポロリと涙を流しました。私ははっとさせられて、だまっただまま子どもを抱いてしまいました。

クラスの話し合いの時も、父母の熱心さに時を忘れることがあるが、そういう場合、人の前で話すことに抵抗を感じて、或いは右のような気持は表現できないことがあるのではないかと思う。しかし、こういうたよりを寄せられるとほろりとさせられ、母親の気持がじかにぶつかってくる。

ただ、このような感情を文字に残すと、その面だけ強調される懸念もあるし、その他いろいろの問題にぶつかると、もちろんそれらの問題は、たよりを始める前に予想されたものではあるが、たよりを実施してみても、その問題をどう考えたらよいかを改めてまとめてみた。

—— 生きたたよりにするには ——

① 持ちつ、持たれつ、

ペーパーによるたよりは、口による応答とちがい、スピーディーではない。ラブ・レターよりラブ・テルの時代ではなお更のこと、文にしようと思えば何らかの抵抗を

感じ、その上時間的制約もあって、スムーズに全体を書き表わすことはむずかしくなる。自分自身は幼稚園生活や幼児の姿をある程度のみこんでいるので、うっかりすると心の中にしまっていることと書き表わしたものととの区別を感じなくなる。その点よほど慎重でないと、書かれたことだけ強調されて、もとのもくあみどころかかえってマイナスにならないとも限らない。そこで私はそれまでプリントしたものを時々読みかえして、なるべく広範囲にわたるよう配慮した。もちろんあまり完全を期すと筆が運ばなくなるが……。ラジオ、テレビ、新聞などのマスコミ同志も、それぞれに存在理由があるように、話し合いによる連絡と相俟って、互いに持ちつ持たれつ補い合ったら効果があるだろうと思っている。

② 教えられつ、教えつ

次は七月一日号の三羽の蝶の誕生のたよりの一部である。

・ こんなおどろきを持ちました。

「どうしてあおむしがあんなきれいな色の蝶になるのかな」Tちゃん

「小さいなぎの中にどうやってあんな大きな羽が入ったんだろう」YちゃんとKちゃん

・ 高い広い空へ放してあげましょう。

「羽もすっかりしているようなので、空へ放してあげましょう」と皆でふたをあけると、少しして飛び、戸の所に止りました。そして羽をひらいたり、とじたりしています。きっと今度も一生懸命飛んでみようと思ってるのね。

お母さんもないけどどうやってたら一番よく飛べるのかなって、ひとり考えているのかしら？」と言うと「よく飛べるといいね」と皆じっと見ています。でもまだ飛びません。「まだ考えてるのね。」と言うと、Tちゃんが「あんなに一生懸命考えてるんだから、お花の蜜吸ってるちょうちょなん

かと思ったら、かわいそうね。」と言いました。皆も「かわいそうだね」と話していました。それからしばらくして飛びました。「アバネ。」「元気でね。」

などと見送りながら、さくらんぼの大木の葉のかげに休んだ蝶を見守りました。そしてその中、大空に消えていきました。

よかったね、うまれたんね、
よかったね、ちようちよ。

と歌って祝ってあげました。声もいきわうれしそうです。

子どもたちは右のように、自然の神秘さうたれ、また生命あるものへのあたたかい心が芽生えているようです。子どもたちの虫を追う気持も当然なので、とはいけないとは言えませんが、とつた大切な羽など痛めない中に、逃がしてあげるような気持を育てていただけたらと思っております。

これは子どもの様子を知らせながら、生命あるものへの自分の信念を書き表わして協力を求めている号である。しかしこの信念というものが人により違う場合もあり得るだろう。あまり変ってしまう信念では困るが、いつも謙虚な気持を忘れず、父母の意見も聞き、教えられつつ教えつつという態度を持ちたいと思う。安心して子どものことの相談をかけられるような大らかな気持の教師になれたらと願っている。

③無理をせず

ふりかえってみると三日坊主ではないが、書きたいことを書いてしまったあとや忙しい時は回数が減っている。しかし、決して怠ったとは思っていない。自然の成り行きであろうし、書くことのみにとらわれず他の面もおろそかにしたくないという多忙の幼稚園教師の良心のあらわれであろうとも自負している。

しかしのんきにかまえているわけではなく、たよりを続け、その積み重ねによって

テクニクを覚え、スムーズに実行し、効果のあがるよう努めたいと思っている。

——おわりに——

とにかくクラスのたよりをはじめて一年生である。自分の気持をよく表現できるよいうな子どもたちに望んでいる自分であるが、果してこの一年間のたよりに私の気持が表わせたであろうか。父母にも通じるものがあつたであろうか。

一つ一つの物事に全身を集注させる幼子のその歩み方を見つめて、私もせめてその新鮮さを学び、現在の自分の範囲で、無理をせず、着実に歩を進めたいと思う。

現代の子らは、親からとかく大きく望みをかけられ、それでなくても刺戟が多いのであるから、なるべくやわらかい風潮を作り出す力になれるようなたよりにしたいと思っている。昔のようなのんびりした幼児時代のよさを残すことも考えて——。

(群馬大学付属幼稚園)